

賀茂社家住宅の特徴と保存

永松 尚先生

平成 22 年 10 月 31 日 於上賀茂神社庁屋

(司会)

それでは準備ができたようですので、これから講演に入らせていただきますが、その前に、講師の永松尚先生をご紹介します。皆さまにお配りした式次第の片面に記しておりますものを読み上げさせていただきます。

(ご略歴)

- 1986 年 国立有明高専建築学科卒業
- 1989 年 上田アトリエ (現・株式会社上田篤年建築研究所) 入社
- 1998 年 永松尚建築アトリエ主催
- 1999 年 京都精華大学芸術学部デザイン学科建築分野講師就任
- 2000 年 スクール・アーキテクト一級建築士事務所共同主宰
- 2005 年 同事務所代表
- 2008 年 京都市文化財 (建造物) マネージャー

(主な仕事)

- 京都精華大学施設整備計画第二期工事 設計管理
- 奈良県吉野町町並み整備事業等 まちづくり計画
- 料理旅館吉田山荘改修整備計画 等

それでは、本日の演題は、「賀茂社家住宅の特徴と保存」ということについて、我々が住んできた社家住宅のお話をさせていただきます。よろしくお願い致します。

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました永松尚でございます。本日は、このような一般の者でしたら体験できないような厳粛な式典に参加させていただきまして、心より御礼申し上げます。今回、堀川さまからお声をかけていただいたのですが、会のほうからもご丁寧にお便りをいただきまして、本当に感謝しております。先ほどまで非常に緊張していたのですが、祭壇の前で二礼二拍一礼の参拝をいたしまして、心がすっとなりまして、言葉では言い表せない歴史の力を肌で感じ、非常に感動しているところであります。

ただでさえ、社家の住宅について、社家でない外部の私が話をするにはおこがましい話でありまして、同業者の友人などから度胸があるなと言われました。私は学者ではなく、建築の設計をしておりますので、皆さまのご存知のことがほとんどかもしれませんが、私なりに解釈をし、ここ数年上賀茂の町並みを歩き回って感じていることを述べさせていただきます。こういったことを考えながら、上賀茂の地で設計の活動をして

いる人間もいるというふうに思っただけであればいいな、と思います。

私が上賀茂の社家住宅と接することになったきっかけですが、数年前にある一軒のお宅の改修工事の設計の依頼を受けたことからはじまります。場所は、中大路通りの北端、明神川に面したお宅で、現在も工事中で足場が立っています。近隣の方には長時間ご迷惑をかけておりますが、今年4月から少しずつ工事を進めているところです。伝統的建造物群保存地区のお宅です。他府県の設計の仲間から言わせると、京都の伝統的建造物保存地区での仕事は大変だろうといわれるのですが、京都で設計活動していますと、最初は特に伝建地区だからどうだ、ということは考えませんでした。京都はどの場所で仕事をしていても、風致地区、美観地区など景観に関する非常にきびしい規制があり、伝建地区だから違ったやりかたがあるというわけではないと考えていましたので、当初は伝建地区ということに関してはさほど困ることはないだろうと想定しておりました。それよりも、社家町の中の住宅であることに強い関心を持っておりました。社家の住宅がどういったものなのかわからない時期であり、社家の住宅なのか、住宅でないのか... ということです。

この仕事に関わったすぐの頃は、社家町の中の建物すべてが社家の建築だろうと考えていましたので、社家でないお宅もあるということは全く考えておらず、やがてそれを知ることによって社家の住宅がどういうものなのだろうということのほうがより強い関心となり、どうやって進めていこうかというふうに困っていた時期でもありました。

社家住宅と呼ばれる建築、あるいは、社家住宅ということは我々の業界のなかでもそれほど頻りに耳にする言葉ではありません。ですから、社家住宅とはなんだろう、社家の住まいとはどういうものなのだろう、という最初は小さな疑問符だったのが、徐々に大きな疑問符になりました。こういうところから、社家住宅という伝統文化の世界へ足を踏み入れることになった次第です。

社家住宅とは、どういうものなのか... このようにインターネットで上賀茂社家町と検索すると必ず明神川と土塀の写真がでてきます。さまざまな人のブログなどに、いろんな写真が載せてありまして、当初、私達も社家町の住宅というものはこういう風景のなかにある、これがすべてだと感じておりました。私達という言い方をしましたが、私はこのような古い建物に触れるにあたって、数寄屋大工や左官職人のかたがたと共に一つの勉強会を作っておまして、今回の改修工事というものをこのメンバーでやっております。伝統的な数寄屋建築の分野で長い経験年数を誇るベテランの大工さんであっても、社家住宅はどういうものなのか、ということで、やはりこれは、我々は勉強しなくてはいけないと... 風景の写真のようなものだけが社家の住宅だというのは、浅はかな考えだと知り、勉強しなくてはいけないと思い始めたわけです。

これが私たちが今改修している住宅ですが、ちょうど中大路通りのはんこ屋さんの真向かいの住宅です。先ほどの明神川の土塀の写真に対して、個人的には当初のうちから少し変だなと感じていました。道に面したところに土塀がありますが、川側は上流のほうから土塀が続いてきて、この敷地部分で土塀が切れています。これがなぜなのかということや、

川に面しているお宅にはほとんど橋が架かっていますが、ここだけは架かっていない。更には、社家住宅には2階建てはないということを聞いていましたが、このお宅には2階建てである、などのことです。2階建てについては、後になって調べると増築ということがすぐにわかったのですが、こういったことがあって、このお宅が社家住宅なのかなという疑問が深まってきました。

話を進めていくうちに当初は改修ということで内部だけの話だった計画が、調査が進むと漆喰で塗られた外壁のほとんどが傷んでいることがわかりました。簡単な補修の予定だったものが、全面的に補修をしなければならないということです。調査によって、このようなことがわかったのですが、古い部分の改修計画を検討するにあたって、復元、つまり古いもともとの形を調べてその形が適当であるという要素を含めなければならないということになってきました。こうなると、京都市の景観の窓口（景観政策課）とのより一層綿密な相談が必要になってきます。

そこで、先ほどの疑問なのですが、私達はとにかく全く不勉強で社家住宅がどのようなものなのかについて、イメージしかないものですから、先ずそれをぶつけるしかないということで、私は協議のなかで、もし改修にあたって復元行為が必要なのであれば、ここに橋をかけてはいいか、或いは他のお宅は道からすぐに庭をとおして家の中に入っていけるが、ここは入れないので、庭のメンテをするのに土堀に勝手口をつくっていいか、などというのを平気で市役所に問いかけたりしました。市役所の方がいまだにそういう質問をする人がいるのかという具合で呆れた表情をされていたことが、今でも忘れられないのですが、こちらも当然そのようなことは無理だとわかっていつつ、それによって私達の疑問に対する答えが少しでも返ってこないかということで投げかけてみたわけでもあるのですが、いずれにしても当初は市役所の印象を悪くしました。

それでもとにかく改修の依頼を受けているわけですから、なんとか前に進めなければいけない。そのような折に梅辻先生と知り合う機会を得ました。梅辻先生も社家の町並みを残すことにご関心をお持ちであるということをお聞きし、お宅へ伺いまして私達の事情、素性というものを述べまして、ご理解していただいた結果、勉強会にお付き合いしていただくことになりました。そして具体的な勉強会の活動として、社家住宅の見学会をしましょうということになりました。「社家町の中のいくつかの住宅を見ましょう、それで何かわかることがあったら参考にしてください」、とのご配慮をいただき見学会を始めたのですが、ちょうど一年前その見学の内容を去年の11月に発刊された『みたらしのうたかた』第9号に、寄稿させていただきました。そういうこともあって、本日ここに私が立つことになったわけです。

見学自体は平成20年の秋から梅辻さまのお宅、山本さま、岩佐さま、井関さま、年があけて、この方は社家ではありませんが津田さま、大田神社の参道のところの藤木さまのお宅を拝見させていただきました。大勢で押し掛けて写真を撮って帰っていくというあわただしい見学でしたが、この場を借りて改めて御礼申し上げます。今日はそのうちいくつか

の写真を見ながら、『みたらしのうたかた』の中でも書かせていただいたことも合わせて、興味深い点、あるいは木造住宅として質が高い、などのことを再確認の意味も含めて話をさせていたただきたく思っています。

社家のお宅の写真を撮らせていただいたということですが、社家の街は昭和 50 年年代に京都大学が中心となって大々的に調査をされています。その時に実測されてきちんとした図面を起こされています。我々はそういった観点とは別で、大工さんであるとか左官屋さんであるとか、そういった方の目を通して、どういった普請がなされてきたのか、或いは質の高さだとか、どういった工夫がなされて長い歴史を築き上げてきたのかを調べてみたい、ということで仕事の美しさであるとか、芸術の高さというものをピックアップさせてもらっています。

社家の住宅をみていきますと外壁について、鳥居の形の内玄関、メインの式台玄関、それから大きな妻壁の意匠、そういった部分が一番わかりやすい特徴なのですが、拝見させていただいて非常にどこのお宅も立派な大きな断面の部材でもって、鳥居の形をつくられています。我々の一般住宅の場合だと、たとえば大黒柱や床柱といわれるように部材の大きさ、樹種、それが家格を表したり、一種の造り手のモチベーションを示すのですが、おそらく社家の家では鳥居を作られるときに同じように、材を選ぶであるとか、どのような大きさのものを使うといったことを考えたのではなからうかと思っています。一軒一軒違う断面で形のよい鳥居の形を作っておられるのを拝見すると、見学のときは気づきませんでしたが、樹種は実際は決定されているのかな、ひょっとしたらこの部分にも何か特徴があるのかな、と新たな疑問も湧き、今後また調べていきたいと思っています。

次に、この部分で、勝手な推測を述べさせていただこうかと思っています。もしご存知の方があつたり、それは違うということがあれば後ほどご教示をいただければと思うのですが、上賀茂の社家の町に妻壁とよばれる三角形の面に「冢扱首(いのこさす)」という様式と「東貫(つかぬき)」様式という 2 種類の妻飾りの様式があるのですが、なぜ 2 種類あるのかというのが疑問でした。たまたま見学させて頂いていたお宅は全て東貫様式なのですが、社家町を歩いているとこれとは違うものとして見ることができるのが、少し太い部材(梁)が通り、これを受ける肘木(ひじき)と呼ばれる T 字型の部分があつて、その上端にもう 1 本束柱が建ち、斜め部材でこの真ん中の束柱を支えるような構成です。学校で用いられる教科書を添付していますが、この冢扱首という様式は社寺建築に多く、その中でもどちらかというと神社の建築に多く見られます。勾配が大きくて真ん中の柱を三角形で支える、これが冢扱首様式なのですが、社家の住宅にこの冢扱首の様式があつても当然なわけですし、ところがもう一方で、東貫様式がある。京都市の伝建地区の景観指導マニュアルにも、この上賀茂地区でもし新築、改築するのであれば、外壁には冢扱首様式か、若しくは東貫様式かのどちらかを採用するようにと書いてありますので、2 種類とも学術的にも認められているのだと思います。

それでも、なぜなのか。ということで、私は当時、情報が欲しいため講習を受け、京都市の文化財マネージャーという資格を得ました。そこではいろいろな建築の歴史の先生方と交流することができますので、話が聞けるのではないかとということで、上賀茂の社家町に2種類の様式があるのはなぜですか、と何人かの先生に聞いたりもしたのですが、推測はできるが立証ができないということで、なかなかはっきりとした答えが頂けません。先ほどの冢叔首は住吉大社の写真にもありましたように、社寺建築からこの形がきたというのはありえるのですが、東貫様式のほうは、木造建築の発展の過程で、たまたまこのような形ができたのではと。例えば、木造住宅の発展ということでは、これは中川といって京都市北部の北山杉の産地の地区で、梁と束を積み上げた例が民家で残っています。ところが、民家からの影響というのは面白くないな、と勝手に私自身は考えました。これは金沢の武家屋敷です。このような川と塀の風景があるので上賀茂と似たところがあるのですが、中川の民家同様に北陸地方には「吾妻建て」という同じような形の民家がありまして、そこから金沢の武家屋敷の形が来ているというような調査もされているそうです。上賀茂もこれと同じようなことなのではないか、ということも考えられるのですが、ちょっと面白くないなと考え、もう少し調べていこうかということで、これが法隆寺の^伝法堂という建物です。二重虹梁（にじゅうこうりょう）という構造で、虹の梁と書くとおり、二重に梁がかかっている、先程の北山中川の住宅にも通じる場所がありますが、このようなものが同じ社寺建築から発展してできていったのではないかな、というような推測もある先生方と考えたりもしました。

つい最近も上賀茂をいつものようにぶらぶらと歩いていまして、割と神社に近いところの住宅ですが、冢叔首様式の住宅を眺めてみました。この真ん中の柱を支える三角形のものが、間口の大きな住宅に見ることができます。一方で小さなところ、間口（正面の幅ですが、）が狭いところにもこういったものが施された例もあります。狭いところの方が非常にきれいだと思います。間口が狭いところは、妻飾りのバランスがきれいだと思うのですが、この大きな間口の場合は、上のところだけちょこんと残っているようにも見えます。これが先ほどの住吉大社の写真にあったような真ん中の柱をきつい勾配で両側から支えるのは意味があると思うのですが、住宅の建築に用いられるようになって、屋根の勾配が緩くなっていくとあまり意味をもたなくなっていくのではないかと考えています。

これは私達が2件目に見学させていただいた山本さまのお宅なのですが、実質的には貫が隠れていますが、柱貫様式です。ここには何も(斜め材が)ありませんが、冢叔首様式にみられる肘木が残っています。これは冢叔首様式から、屋根勾配が緩やかになったため、ここは要らないということになり、ひょっとしてこの斜めの部材を取って、東貫の様式に変わったのか、と勝手に考えました。先日、山本さまのお宅に訪問させていただいて、今日このような話をするという話をお伝えしたところ、山本さまの奥さまは「そうかもしれない。うちは新しい家ですから」とのことでした。当時私達が見学した中では一番古い住宅だったのですが、社家の中ではまだ新しい建物と仰いました。進化の過程が、ここにま

だ肘木だけが残っているという考えもあながち間違いではないと思っていて、今度またどこかの先生に聞いてみたいと思っています。

こちらのお宅は冢叔首様式なのですが、写真の加減で冢叔首の斜めの部材が見えにくいと思います。ほとんどは、はしらぬきの形と同じように見えると思いますが、このように間口が広くゆったりとした妻壁です。これは、社家住宅は式台玄関があり、間口の方向に奥に間取りが広がっていきますので、どうしても間口が大きくなっていきます。それでこの部分をいかにかきれいにさせるか、あるいは立派にみせるかということで、東貫様式のほうが割と日本人が好むデザインであったかもしれません。それで冢叔首の様式から東貫の様式に変わっていったのではないかと。こちらの写真は間口が狭いのですが、こちらは絵になってきれいな形で見えると思います。間口が狭い部分で表現するときはこのままで、広くなると東貫様式になったのではないかと最近考えていますが、間違っていれば教えていただきたいなと思います。

次に、私たちが内部を見てびっくりしたのがあります。床差しの天井です。一般の住宅では床の間に対して竿縁を平行に置きます。ところが、床差し天井といって、このように床の間に向かって竿縁を設ける。これは江戸時代ごろから忌嫌っていたものです。切腹の間がこの形だったということで、たぶん武家から起こった考えだと思います。当初は梅辻さんの書院は公家の建物なので、当然公家は武家ではないのでこのような考えがあってもおかしくないと思っていたのですが、他の社家住宅を見ていくとほとんどが床差しの天井になっていたのも、武家とは違う、れっきとした社家の確立された考え方があったのだろうと非常にこれも伝統の力、歴史の力を痛感しました。

次に、内部の話が続きますが、これは差し石というものです。この写真は玄関の内部の上り框の下に敷かれているものですが、茶室の建築などで、茶道をされている方ですとお解りかもおもいますが、茶室建築では土台がわりに石が敷いてあります。最近ほとんどがゴロタ石といって、ごろごろした石を置くのですが、ここでは形が整ったきれいな石が並んでいます。拡大するとほとんど四角です。これは賀茂川で採られた石だと庭師の方は言われました。昔はごろごろあったと言われましたが、このように人工ではなく自然に四角い形になっている石です。非常に立派なものだそうです。この写真は、無鄰庵であるとか、颯颯庵と言って三和銀行の建物の中にある裏千家の茶室ですが、こちらの無鄰庵では明治の建物ながら、ゴロタ石しか使われていない。こちらは、丸味を帯びて整った石を使ってあるのですが、川の石ではないと言っておられたので、なかなか探すのに苦労するというこのようです。

今年の夏、京都ではたくさん雨が降りまして、賀茂川が濁流でもまれた時期がありました。数日にわたる非常に大きな濁流で、久しぶりにこのような光景を見たなというくらい濁流でした。雨が上がった直後の休日に河原を歩いていますと、西賀茂橋から下流に向かって数百メートルあたりの川底に上流からたくさんの堆積物、土砂が流れてきて溜っていました。ごろごろと石が見えたので、私自身も降りて、差し石のようなものがない

かと思っ、一時間半ほどあるいてようやくそれらしきものを一個見つけました。〈手に取って〉このような形ですが、ところが平行四辺形です。これはたまたま大雨で流れてきたものですが、昔はゆっくりとした流れでちょっとずつたまってきた石を、石屋さんが拾って集めたということを考えれば非常に手間のかかる仕事をされているのがわかります。

〈フロア〉

流れの状況によっては石がたくさんあるところとないところがあります。家のあたりは西賀茂のあたりですが、石を拾いに河川敷にいくと、結構四角もあります。

ただ質が高いのは間違いないと思います。写真は持ってきていませんが、賀茂の七石と言われるものがあって、これも庭師さんが何軒かの上賀茂のお宅を拝見してみると、すばらしいが今は採れない、という石がお宅の庭に、一軒のお宅にすべてあるわけではないのですが、これは、と思われるという石が残っている、もしくは埋もれている可能性が高いと仰っていました。写真がないため賀茂の七石というものが賀茂のお宅にたくさん残っていますということを述べるにとどめておきます。

こちらも賀茂の住宅ですごいなと感じているものです。これは井関さまのお宅を拝見させていただいたときに教えてもらったことで、龍の口(りゅうのくち)と呼ばれるものが賀茂の屋敷の軒の下にあります。写真では草が覆われてわかりにくくなっていますが、排水するための設備として石が集めてあります。この写真は梅辻さまのお宅ですが、この部分が龍の口だろうと推測しました。井関さまに教えていただいた話ですが、排水口であって石を敷き詰めているだけだと。井関さまのお宅を拝見させていただいたのは、四件目の見学でして、そのあとの五件目、六件目たぶんここだろう、というものが残っていました。何がすごいかと、教えていただいた話では、1つはこういうものがあるおかげで、かなり的大雨が降っても庭に水が溜まることなく、しばらくすると排水します、とのこと。非常に排水能力が高く、賀茂の屋敷という庭が非常に広いので、相当な排出量になると思いますが、それが発揮できている。これは古来から渡来豪族である秦氏との交流があったのでこういった知恵が脈々と受け継がれていったのではないか、ということも仰っていました。また、この龍の口という存在によって上賀茂の屋敷は床下から腐るということはない、とも仰っていました。私達関わっている改修工事でも、実際に床をめくってみると害はありませんでした。京都の町なかの町家で床をめくったりすると、この建物は水に浸かったな、と必ずわかることがあります。床の下に水が溜まると粒子が沈殿しますので、まま乾燥していきますと、床下の土の表情が、きめ細かい状態で残るため、ここに水が入ったなと我々は推測できたりするのですが、私達が改修している家でもそのようなものはありませんでした。ただ、明治以降、大正時代と思われる頃に改修したと思われる水廻り部分だけは傷んでいました。白アリの害であるとか、水による地盤沈下といったことと思われる。一方、古い方は残っていたので、井関さんが仰っていたように排水性が高かつ

たのだと。このような話は、もう1つあって、井関さんが仰るには、井関さんのお宅と梅辻さんのお宅と大田神社の参道の藤木さんのお宅でこの形を見たのですが、多分、竜の口は、明神川に面していないお宅にあったのではないかと。川から離れたところでこれを造ったのではないかとということです。ですから、我々の改修現場には存在しないのかもしれませんが、川に近いところでは、当然川の水に脅かされるということもありますが、排水もできる。ところが、川から遠いところでは、こういった竜の口のようなものを作って排水の措置を講じたのではなかろうかと仰っていました。

日本の建築は木造なので、火と水が一番困ります。水に対する措置においてレベルが昔から高いと考えています。去年ある新聞記事を見つけました。御所のなかの旧一條家の邸宅の発掘の記事です。その中に石を敷き詰めて排水を講じた施設が残っていた、という記事がありましたので調べてみました。これがその報告書の中のスケッチです。直径一メートル、深さ一メートルくらいの石を敷き詰めたのが、一條家では軒の下に設けてあるというように述べてありましたので、ひょっとして何かの関係があるかなど。願わくば、上賀茂の技術が御所に伝えられていたというような話があればと、その他を読み漁ったのですが、まだ龍の口という言葉ほどの文献からも見つけておりません。京都市文化財報告書でも集積、石を集めるとしか書いてありませんが、同じような雨水を排水する施設であった、ということでちょっと関係があるのではないかと考えています。

今までピックアップしたものは、全てが質が高い、あるいはかなりの歴史を感じる、重みがある、といって大工、左官、庭師のメンバーの皆が感嘆したところです。実際にはもっとたくさんの面白いと思うところや、これは何かの参考にできないかと思うところがあります。

これが梅辻さまのお宅の書院の濡れ縁の水勾配です。ここでは奥行き方向に板が張ってあります。これが外に向かって板が張ってある場合だと、水勾配というのは当然なのですが、家の壁と平行方向に板をはってあるにもかかわらず、水勾配をとってあるというのが、細かな作業をしているというのを大工さんが言っていました。これは元々檜皮葺きの屋根だったものが、瓦に替えられているということから、個人的には沈下もあるのではないかと思ったりしたのですが、どなたかのインターネットのブログにも同じように水勾配のことが書いてあったので、正しい解釈なのかと思っています。非常に丁寧な作業です。

これも梅辻さんのところですが、書院の軒樋が長く出ていまして、その軒樋の下です。先ほどの一條家と同じように、石を囲ったこの位置に水が落ちるのですが、雨のときは少しだけ水が溜ります。しかし、それ以上は水が溜らないので、こちらも竜の口と同じようなことがあるのではないかと考えております。

こちらは山本さまのところの瓦ですが、吉野の桜と龍田の紅葉による文様です。このような瀟洒な工夫というものが上賀茂にたくさんあります。今日の演題では保存という言葉も入っていますので、この話もしないといけないのですが、このような古い伝統的なもの

を改修、補修するにあたり、再び瓦を焼きなおすのは大変なことだと思います。保存・維持していくということの大変さは、私自身何軒も拝見させていただいて非常に痛感いたしています。

岩佐さんの池越しの俯瞰なのですが、先ほどの差し石とは違って大きな石で基礎が造られています。写真はないのですが、建物と建物の間に溝のようなものが掘ってあります。岩佐さまのお宅では、社家町の中でも賀茂川のほうに近い位置にあるということで、古い古文書の中に一度だけ賀茂の町が水に浸かったという記事があるそうですが、そういったこともあって高床にするだけではなく、防水の役目なのか、あるいは耐震の補強なのかも含めてわかりませんが、だいたい50cm以上巨石が敷かれています。社家の町が、賀茂川の水を上手に利用する一方で、川とのつきあいも大切に配慮されていたのだと感じました。治水・利水とともに水に対する建物のセキュリティが優れていると思います。

井関さまの2階の部屋の設えです。このような竹でもって、その間に塗り壁を施されているというのは、左官屋さんから言われると職人泣かせの仕事がなされているということです。これも遊び心ですね。柱が途中で途切れているような納めかたをされている、ユニークで、こういうものを設計している立場からと見るとうきうきするのですが、遊び心というか、自由な発想で設えを施されています。

同じく、井関さんの家の階段です。拝見させていただいている上賀茂の社家の中で、私が一番気に入っている部分ですが、畳一枚分の中で階段が造られています。今の建築基準法だと寸法的に難しいのですが、このように見下げてみると、扇を広げたように見えて非常に美しい階段です。ご高齢になって足腰が弱ると厳しい階段だと思いますが、木目の方向も放射状に考えてあって、賀茂の地で普請をされていた大工さんたちは、非常に洗練されていたのではないかと思います。

今までみたような質の高いものをどのようにして残すか。改修の仕事となると、実際このことと直面するのですが、実は私達が改修するお宅には、この写真のような昭和の時代に補修された後がありました。これをどのように扱うか。最初は慎重だった施主の方も徐々にこれを和風に直せないかという話になってきます。市役所は自分たちから言い出すと補助を出さないといけなくなるし、施主のほうから言い出すと自分達で負担して元に戻すのか、という話になるのですが、この施主の方は終の棲家を探されていて、この家に自分達家族は50年くらい住むけれども、建物は100年は残ってもらわないといけないということで、きちんとした形に戻しましょう、という話になりました。ところが、伝建地区の条例ができる以前からこのようなモルタルの外壁であったのであれば、それが「既存」である、という法解釈も国の文化庁にはあると市役所の方から指摘されました。法律ができた後にこの形になったのであれば、法律に適していないので元に戻しなさい、ということになるのが、法律・条例ができる以前からこの状態だったのであれば、それが「既存」だと…。最終的にはこの考え方はなくなり元の形に戻すということになったので、昭和の時代に施

された防火措置、モルタルをはぎとって和風の形に残すという形で今進めている状況です。

上賀茂地区の位置づけについてですが、一昨年に新しい歴史街づくり法という法律ができました。これに基づいて京都市で歴史的風致維持向上計画というものが制定されて、上賀茂地区が重点地区に選ばれています。これは直接には賀茂に所縁の皆さんであるとか、一軒一軒お住まいの方に恩恵が得られるわけではないのですが、重点地区に選ばれているということで、明神川の前は整備をされましたが、離合するには危険な道ということもあり電柱を隠すであるとか、のようなことに可能性があるのが1つ。

また京都市の施策というものが、市街地中心部の町家主義なのです。4万軒以上ある町家をなんとか残しましょうという条例や政策がありますが、全て頭文字に「京町家」とついています。「上賀茂は対象外ですか」と聞きますと、「できますよ」、とは言われるのですが、何せ京町家〇〇制度であるとか、そのような名前が付いています。中には耐震の制度でしたが、東大路、北大路、西大路の過去に市電が通っていた路線の中の地域だけを対象とした古い建物に関わるプログラムなどがありまして非常に忸怩たる思いをしていましたが、ようやくここも重点地区に選んでもらったということで、ひいては注目してもらえ、いろんな意味で重要な町並みとして認知してもらえ、京町家だけを対象にあったような京都市や民間のNPOのプログラムが上賀茂の方にも目を向けてもらえるのではないかと期待しています。このようなプログラムが増えると一軒一軒に関する機会が増えるということにもなり、できるだけ町がよくなればと思います。

先ずはこの社家町の建築、写真でみたような質の高いものをいかに残すかということで言えば、建築を仕事としているので、つい本音と思われるかもしれませんが、社家町の歴史を保存している施設はないですね。京都府立文化博物館にいても社家町のことは触れていません。ですから、社家の歴史とか文化を遺すような建物を伝統建築のようなもので作ってみてはどうかと思いますし、まずは残すことと、後世に伝えることをなんとか私自身も考えていきたいなということを考えております。微力ですけれどもこの伝統のある賀茂の皆さまの町を、或いは建物というものを、ここでの仕事をたまたま縁があって触れさせていただいておりますので、いいものが後世に伝えられるように私も努力させていただきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。